＜全国納税貯蓄組合連合会会長賞＞

# 暮らしを支える「見えない力」

相馬市立中村第一中学校　３年　安部　紗希

最近 SNS を見ていると、ある投稿をよく目にするようになった。発端は学校のブログなどにアップされた、何の変哲もない給食の写真であることがほとんどだ。「量が少なくて可哀想」「これでは栄養が取れない」と、根拠のない一面を切り取った意見が飛び交う現状を見て、私はいつも悲しい気持ちになる。

私の母は、私が通う中学校で給食調理員として働いている。私の学校は市内一の生徒数を誇り、作る給食の量も膨大だ。毎日の給食は、母たち調理員さんと、栄養バランスや季節の食材を考えながら日々献立を練ってくださる栄養士さんの力によって成り立っている。

給食を支えてくれている方は、それだけではない。私の住む相馬市では、特産品の青のりやかれい、とらふぐ等が積極的に給食に使われている。旬の地元食材を食べることは食育にも繋がる。また、相馬市では小・中学校の給食費が無償化されている。すなわち、毎日の給食は、市民の方々が日頃納めている税金と、それを適切に使ってくれる行政の方々の力によっても支えられているのだ。私が、「給食が粗末」という投稿を見て悲しい気持ちになるのはきっと、このように給食を支える「見えない力」を知らずに、表面だけで批判している人がたくさんいるからだと思う。

私は、この話は税のあり方そのものにも通じる部分があると感じている。SNS を見ていると、税や行政に対する批判がよく見受けられる。確かに、物価高が進み暮らしが苦しい中で、一生懸

命納税している人からすれば、税は重い負担でしかないかもしれない。しかし、税が暮らしを支える「見えない力」であるという事実を無視することは、現状を良くするどころか、さらに不満を高めることにしか繋がらない。全ての人々がその力に気づき、前向きに納税していける社会にするためには、国や行政の努力も不可欠だ。税が暮らしにもたらす恵み、納税者の思い、そして行政の働き。全ての立場の人が、互いの「見えない力」によって社会が成り立っていることを認識し、感謝の気持ちを持てる社会こそが、本当に豊かな社会なのではないだろうか。

　私は将来、社会科の教員を目指している。社会の仕組みを教える上で、税金は絶対に欠かせないテーマだ。中学生になってからの３年間、税の作文を通して学んだのは、税とは決して単なる「負担」ではなく、私たちの日常を根底で支える「見えない力」だという事実である。私は将来、教壇に立ってこの事実を子どもたちに伝えたい。社会にあふれる表面的な批判に流されることなく、見えないものに想像力を働かせ、その価値を正しく理解できる大人を育てたいからだ。まずは私自身が、社会を支える「見えない力」の一部となる自覚を持ち、誇りある納税者として自分の未来と社会を切り拓いていきたい。